









修く圖書

貞丈抄卷一

目録

人のめしはくまに仁をばらるるまじ

奏者の事

公方様御對面以下の事同私るの事

使者可ら得事

公私はかすひの事









己人の御舟通き不ゆくタカザリ新法又タカハナ鼻とタカハナしき、己人の向けと  
あつくり足音タカハナさる尾氣の事也

○新法タカハナの事とあけて多しのお清なること○鼻とタカハナしき、己人の鼻の  
うらとまきくすりこむや○屋敷タカハナハヤシ

又御舟は祇候の付ひざとをぬき入るはくす又いふありし  
まゆりつとも夢と立ててさくさくす扇はくさくさくびあせ  
とのこひ鼻とむびぐび但難儀なるは地とがげむきん  
とるどかあせとものごとくし又町ちて出伏の付はつと  
傍宗元と物清と一はとさうらとをどすべし

○祇候は御舟は月一夫人の御舟はおほのありこと○ひざとをさくさく  
まこととすきくすてはと希くくを安んずること○いづか夫人の  
御舟はつと一はつと希くくを安んずること○いづか夫人の  
上よとくし○夢と立ててさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

又菫とくめる人のこととけけの、根蕪  
○菫とくめる人のこととけけの、根蕪  
也かえがらのゆい侍の者いひとけけの、根蕪  
もひていや一のゆい侍の者いひとけけの、根蕪  
まゆりつとも夢と立ててさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
かしてひいてありさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
上氣はすき人の死く申さくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

打りけ名はー打りけ名はー打りけ名はー  
○打りけ名はー打りけ名はー打りけ名はー  
緒と名はーの上よりけりてさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
けりてさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
ゆい侍の者いひとけけの、根蕪  
○打りけ名はー打りけ名はー打りけ名はー  
の事とくめる人の死く申さくさくさくさくさくさくさくさくさく  
ゆい侍の者いひとけけの、根蕪

○打りけ名はー打りけ名はー打りけ名はー  
緒と名はーの上よりけりてさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
けりてさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
ゆい侍の者いひとけけの、根蕪  
○打りけ名はー打りけ名はー打りけ名はー  
の事とくめる人の死く申さくさくさくさくさくさくさくさくさく  
ゆい侍の者いひとけけの、根蕪







又すきしめれたるものもPのてん人かにくまも御おも  
出来ひ兵ご人の侍考もきくぐひP—エ作ひゆを速<sup>スガエ</sup>  
トとせつひん<sup>ト</sup>ぎめん

○伊勢子あひひりんこの侍考も入る様かとい方ぐりマゴとたんとて  
取り入ると云云○アギん思議こぢひそくすとよそぢひひ  
わかくぬゆとア也○年おいそころなるもの○赤まじのきん侍考  
ひきの直き様もほいさきり金つりひとして西赤光のまじ侍考  
見せつけてあげぬと云君をそりりあざける勢と云云○御おも出  
来といふりあるものも越度よひまりたると云也

又若き人年考とわのけご人の赤考とさしひりゆらんが  
い我より<sup>ニタテ</sup>のり人なりとも年よりなるに<sup>ニ</sup>教ひるらん  
よくい恩申せも<sup>ヤリ</sup>いひん但没晴の所いりも我家の種  
とPをう<sup>シ</sup>

○老人とよまあふり<sup>シ</sup>も日中も同じく礼儀のうし○没晴といふは  
不没候といはむけのものと云らる

一 一人又うやまひん人よ物事<sup>シ</sup>けい我ぬとそぞ(づりて我い  
まのあいらぬやまゆゆるらう)

○そい(づりて)るるが服の方さかやとそまの方(づりて)るる  
し(づりて)るるがあはれんぬとそまの方(づりて)るる  
単(づりて)るるが物P付のりて投をく(づりて)るる  
ハ口申のいきと一人ま人はそれけりまきるの用(云)

又あまき人の髪かもし神あり<sup>シ</sup>沈ときく<sup>シ</sup>下代い但  
ほぐくゆひん<sup>ハ</sup>尾巻<sup>シ</sup>又男い<sup>シ</sup>おと<sup>シ</sup>不用<sup>シ</sup>老<sup>シ</sup>  
よま<sup>シ</sup>菴<sup>シ</sup>香<sup>シ</sup>丁<sup>シ</sup>子<sup>シ</sup>四<sup>シ</sup>季<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>用<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>能<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>そ<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>こ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>  
ゆひん<sup>ハ</sup>こ<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>い

○近ハ近香也今ハ近香と伽羅と區別ありとも古ハありて近とソリ  
也○近くゆひん<sup>ハ</sup>尾巻<sup>シ</sup>也今ハ近く香(い)人ま人の白果<sup>シ</sup>  
こ(づりて)都<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>せ<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>き<sup>シ</sup>我<sup>シ</sup>月<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>き<sup>シ</sup>こ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>せ<sup>シ</sup>ぐ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>香<sup>シ</sup>  
わ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>也○き<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>香<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>物<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>つ<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>湘<sup>シ</sup>合<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>  
と<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>男<sup>シ</sup>め<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>似<sup>シ</sup>合<sup>シ</sup>ず<sup>シ</sup>也○菴<sup>シ</sup>香<sup>シ</sup>今<sup>シ</sup>ニ<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>朽<sup>シ</sup>香<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>菴<sup>シ</sup>香<sup>シ</sup>  
云ハ香<sup>シ</sup>なり<sup>シ</sup>是<sup>シ</sup>ハ菴<sup>シ</sup>香<sup>シ</sup>入<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>物<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>菴<sup>シ</sup>香<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>



























おきくゝるはわづらひの細きゆとよまよと云也よまよのテシキはまきりこしよ  
余の付たの方也こしの方よまよして供するはより右の方の依りなり也  
女房元はめして後こしとそと出たきいれを付た人よりあ人  
くれありしはてまよりまきりけりなり

○女房より女房の事なれどもいやまき女と女房といふはさる也○こしと  
そと出たはたれいふ事なれども也板書より女房元はこしはめりてい  
まよりの元こしとそと出たきいれなりなりいふまよりの女房のす  
りざなり

公方極めはこしつれはよりあはれひなり

○公方極めはこしつれはよりあはれひなり○こしつれはよりあはれひなり  
いふとそと出たはよりあはれひなり

一 諸役のゆゑ公家より皆賞就武家のハ太刀と賞就なり

○流役はまきりまきりなり○流役はまきりなり○公家より皆賞就武家のハ太刀と賞就なり  
装束といひまきりまきりなり○武家のハ太刀と賞就なり○武家のハ太刀と賞就なり  
とそと出たはよりあはれひなり○武家のハ太刀と賞就なり○武家のハ太刀と賞就なり  
ゆゑもまきりまきりなり○武家のハ太刀と賞就なり○武家のハ太刀と賞就なり

一 車あはれは車床風をどく女房のす時立は付直る存ん

○車は作し御新車とりおし車の上は御服の袖なり物と作りてまよ  
なる也まよと作りてりくは車は糸元の車なり○車の車はまよりけの  
車なり○まよりの車あり車は故実ハ公家の知るゆゑに諸物桃花  
葉草なるどく云公家の装束の書より又車の書と云は巻物也世に  
あり武家の故実より下は公家の故実者よりなり○又官職御要  
といふ書板行より其書より糸元の車の法はなり○車床風の  
は御新車より一本より車床風をどくまよりまよりまより  
直る存んまよりなり又板書より車床風とて車の内は車床風とてなり

一 御洋の付は魚い糸いせんやう社政をと先ハ神まのこより立

まよりまよれたのまよ上げ右のまよ下けておて糸の御新車  
りしにゆりまよいとえをとり我右とまよりおて上の方とま  
せやうし御丸の方へ魚い紙のなびくまよりまよりまよりまより  
まよ御洋とてまよりまよりまより又えをとりてまよれ  
まよくたと上げてお屋まよ也















ともいふ教は是十古又いふ二つなりともき下二ついえ及ん

つばいあてせのきなりなる二つあてはるる教は小神中のいふ

ありせとまるといふは織入の小神の中はあてせと神をてまのり

二つえ及んずいといふ二の字はあてせなりなり一はえ及んずん

希くはりの書遠し酒りの常小神のけは希くはりの小神とめま

てはる一帯の礼式は多きをあてせ小神二つ遠るゆえ及んずん

教は二つ也ともあてせとあてせ入るゆえ小神二つといふは小神

練貫ハ二重とて二つ也公方振ハ一進上を別あてせ

練貫の本字は練貫也練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練

貫はたてぬきと云字は練貫の字は縮布なりたてぬきのぬきと云字は練



















































































































序に詳述されい客人の考(おのき)と向は極めていく夜も引くく(盃  
とわけて一雨はあがり居て引くもあがる(屋敷を極む)

一 夫人の由盃下(盃)に引く(何は)い(き)の(る)が(る)引く(人)の  
希(由)盃(持)て(引)いて(引)盃(と)な(て)引(り)の(人)は(後)一(は)是(が)あ  
賞(祝)の(ん)あ(し)い

○下(盃)の中(の)人(に)引(り)の(人)の(盃)原(載)り(の)人(也)引(き)の(き)の(盃)方(三)方  
有(り)の(盃)各(に)別(は)は(い)き(の)と(三)有(り)一(盃)と(は)い(き)の(盃)は(あ)り(の)右(の)人  
よ(り)引(て)お(た)た(の)の(き)引(き)の(盃)と(お)て(引)希(り)引(て)原(載)人(の)希(り)引(い  
き)の(盃)と(引)て(引)し(と)下(は)引(て)あ(り)引(て)盃(と)な(て)原(載)人(の)希(り)引(い

又(こ)有(り)引(り)脚(盃)と(な)て(由)引(き)す(か)引(り)の(人)の(希)一(由)  
引(持)て(引)て(引)き(と)引(り)引(り)の(人)引(盃)と(り)て(の)ま  
ま(引)又(人)よ(り)引(り)引(り)盃(と)な(て)の(心)人(は)後(一)は(事)も  
有(り)引(り)の(あ)美(ち)く(と)引(り)も(何)る(づ)一

○引(り)引(り)引(り)盃(と)な(て)引(き)す(か)引(り)の(人)の(盃)原(載)り(の)人(也)引(き)の(き)の(盃)方(三)方  
有(り)の(盃)各(に)別(は)は(い)き(の)と(三)有(り)一(盃)と(は)い(き)の(盃)は(あ)り(の)右(の)人  
よ(り)引(て)お(た)た(の)の(き)引(き)の(盃)と(お)て(引)希(り)引(て)原(載)人(の)希(り)引(い  
き)の(盃)と(引)て(引)し(と)下(は)引(て)あ(り)引(て)盃(と)な(て)原(載)人(の)希(り)引(い

口(の)上(は)引(て)お(た)た(の)の(き)引(き)の(盃)原(載)り(の)人(也)引(き)の(き)の(盃)方(三)方  
有(り)の(盃)各(に)別(は)は(い)き(の)と(三)有(り)一(盃)と(は)い(き)の(盃)は(あ)り(の)右(の)人  
よ(り)引(て)お(た)た(の)の(き)引(き)の(盃)と(お)て(引)希(り)引(て)原(載)人(の)希(り)引(い  
き)の(盃)と(引)て(引)し(と)下(は)引(て)あ(り)引(て)盃(と)な(て)原(載)人(の)希(り)引(い

又(ま)の(人)の(心)の(盃)と(引)て(引)き(と)引(り)引(り)の(人)引(盃)と(り)て(の)ま  
ま(引)又(人)の(心)の(盃)と(引)て(引)き(と)引(り)引(り)の(人)引(盃)と(り)て(の)ま

○引(り)引(り)引(り)盃(と)な(て)引(き)す(か)引(り)の(人)の(盃)原(載)り(の)人(也)引(き)の(き)の(盃)方(三)方  
有(り)の(盃)各(に)別(は)は(い)き(の)と(三)有(り)一(盃)と(は)い(き)の(盃)は(あ)り(の)右(の)人  
よ(り)引(て)お(た)た(の)の(き)引(き)の(盃)と(お)て(引)希(り)引(て)原(載)人(の)希(り)引(い  
き)の(盃)と(引)て(引)し(と)下(は)引(て)あ(り)引(て)盃(と)な(て)原(載)人(の)希(り)引(い

又(下)の(盃)の(盃)と(引)て(引)き(と)引(り)引(り)の(人)引(盃)と(り)て(の)ま  
ま(引)又(人)の(心)の(盃)と(引)て(引)き(と)引(り)引(り)の(人)引(盃)と(り)て(の)ま

○引(り)引(り)引(り)盃(と)な(て)引(き)す(か)引(り)の(人)の(盃)原(載)り(の)人(也)引(き)の(き)の(盃)方(三)方  
有(り)の(盃)各(に)別(は)は(い)き(の)と(三)有(り)一(盃)と(は)い(き)の(盃)は(あ)り(の)右(の)人  
よ(り)引(て)お(た)た(の)の(き)引(き)の(盃)と(お)て(引)希(り)引(て)原(載)人(の)希(り)引(い  
き)の(盃)と(引)て(引)し(と)下(は)引(て)あ(り)引(て)盃(と)な(て)原(載)人(の)希(り)引(い

○上(の)引(り)引(り)引(り)盃(と)な(て)引(き)す(か)引(り)の(人)の(盃)原(載)り(の)人(也)引(き)の(き)の(盃)方(三)方  
有(り)の(盃)各(に)別(は)は(い)き(の)と(三)有(り)一(盃)と(は)い(き)の(盃)は(あ)り(の)右(の)人  
よ(り)引(て)お(た)た(の)の(き)引(き)の(盃)と(お)て(引)希(り)引(て)原(載)人(の)希(り)引(い  
き)の(盃)と(引)て(引)し(と)下(は)引(て)あ(り)引(て)盃(と)な(て)原(載)人(の)希(り)引(い











たのひめて捉めるといふと物とついでにまゝにまゝのひめ  
人立のて後はまゝなるが徳の周なりまゝなるはまゝし

○たのひめて捉めるといふと物とついでにまゝにまゝのひめ  
まゝなるはまゝなるが徳の周なりまゝなるはまゝし

又永正六年四月の比りそのまゝ上洛の時父のひめ故後列へ

尋ねし時をてのひめ常の徳子のひめりの左へまゝに徳

昭院殿仰りしひめ九へまゝに徳と入まゝでまゝ

の上とついでに右へ徳と仰りしひめ徳と入まゝでまゝ

○永正六年一本は十八年と向ひての字と十八とは一遠へるまゝし六

年と云と用ひし永正六年五百五十六代後柏原院の比の年号とて將軍義

隆公の比代し○ついでにまゝに上洛の時とついでに徳と入まゝでまゝ

上洛と云と用ひし永正六年五月將軍義尹公初義隆後義隆惠林院殿仰りし

○永正六年五月將軍義尹公初義隆後義隆惠林院殿仰りし

周防國と云と用ひし永正六年六月義興と云と用ひし

義尹公と云と用ひし周防國と云と用ひし上洛と云と用ひし

○永正六年六月義興と云と用ひし

○永正六年六月義興と云と用ひし

○永正六年六月義興と云と用ひし

○永正六年六月義興と云と用ひし

○永正六年六月義興と云と用ひし

○永正六年六月義興と云と用ひし

○永正六年六月義興と云と用ひし

○永正六年六月義興と云と用ひし

○永正六年六月義興と云と用ひし

○永正六年六月義興と云と用ひし

○永正六年六月義興と云と用ひし

○永正六年六月義興と云と用ひし

○永正六年六月義興と云と用ひし

○永正六年六月義興と云と用ひし

一

他家へ出でては我方の徳の人解まゝにたどく我よりも下

ひの人なりとも必し捉とまゝし況やよまゝ徳等も亦乃

人なりとも捉とはまゝに

○我よりまゝの人と云我よりまゝの人と云人又いまゝ人のひめ又我よりまゝの

ひめと云我よりまゝの人と云我よりまゝの人と云人又いまゝ人のひめ又我よりまゝの

ひめと云我よりまゝの人と云我よりまゝの人と云人又いまゝ人のひめ又我よりまゝの

ひめと云我よりまゝの人と云我よりまゝの人と云人又いまゝ人のひめ又我よりまゝの

ひめと云我よりまゝの人と云我よりまゝの人と云人又いまゝ人のひめ又我よりまゝの

ひめと云我よりまゝの人と云我よりまゝの人と云人又いまゝ人のひめ又我よりまゝの

ひめと云我よりまゝの人と云我よりまゝの人と云人又いまゝ人のひめ又我よりまゝの



Handwritten mark or signature in blue ink at the top of the left page.

Faint handwritten text in a cursive script, possibly a list or account, with several red circular initials or markers interspersed throughout the lines.



